導師オッショーの台本

高橋Ａ全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
導師オッショーの台本

【Ｎコード】
Ｎ２００１Ｙ

【作者名】
高橋Ａ全

【あらすじ】
少年が迷いこんでしまった世界は、『台本』によって支配されていた。誰もが自分専用の『台本』を持っていて、その通りに行動することを定められており、『台本』の『設定』から逃れることは許されなかった。なぜか『台本』を所持していない少年は、状況が何も分からないまま、ふたりの女の子と出会う。『台本』を所持している女の子たちは、少年が『魔王』の部下で、自分たちはその下僕である、と一方的に説明すると、少年と三人での共同生活を始めてしまう。戸惑い、混乱する少年をよそに、『台本』通りに次々と

イベントが発生し、状況はどんどん変わっていく。そしてとうとう、『勇者』役の少年が、敵としてあらわれる。『魔王』の部下と『勇者』、ふたりの少年は生命をかけて対決することになるのだった。

プロローグ（前書き）

この作品は、立花潮美さんの同名の小説を、許可を得て微修正し、投稿しているものです。

初投稿で、テストを兼ねています。おかしな部分がありましてもご容赦ください。

プロローグ

荒野を歩く、三つの人影があった。
一人は小柄な男であり、もう一人は長身の女である。三つ目の人影は、外見こそ人間の女に似ているが、どうやら人間ではないようである。
男が口を開いた。
「見わたすかぎり、岩や石ころばかりだね。どこまで続いてるんだろう」
若い声である。むしろ少年と呼んだほうが、ふさわしいかもしれない。
「しばらく続くわ。だが、この先には緑豊かな大地が広がっているはずよ」
そう答えた女の声も若い。女は背が高いので少年より年上に見えるが、実際の年齢は、ほとんど変わらないようである。
そのふたりの腰には、剣があった。どこか重たそうにしている少年に対して、少女はそれを微塵も感じさせない足取りをたもっていた。
おそらく、少女のほうが剣の腕は立つ、と見てまちがいないのだろう。
「ねえ、本当にこの方向で合ってるのかなあ」
情けない声を出した少年を見て、少女は軽く眉をひそめると、三つ目の存在を見た。
「はい、間違いございません。この先に噂の魔法使いが住んでいるはずです、勇者さま」
どうやら、三つ目の存在は人語を解するようである。
「その呼びかた、やめて欲しいんだけどなあ。ぼく、勇者じゃないし」
少年は情けない声を出したが、少女はそれを無視して存在に話し

かけた。
「その魔法使いは、腕が立つのか？」
「噂ではそうでございます、お嬢さま。なんでも、あの八部衆に匹敵するとか」
「眉唾物ね」
少女は吐き捨てたが、存在は気を悪くした様子もない。少年が困った感じで訊いた。
「その魔法使いさん、名前はなんていうの？」
「『フリードリヒ・アレクサンデル・ライゼンブルグ』と聞きおよんでおります、勇者さま。なんでも『全てが死に絶える永久氷土の守護神』のふたつ名を持つとか」
「はっはっは。すごいなあ。名前だけで強そうだね」
少年はのんきに笑ったが、少女は顔も声も不機嫌になった。
「爵位も持たぬ輩が、ふたつ名などと、百年は早い。許せぬな」
「まあまあ、いいじゃない。とにかく、会うだけ会ってみようよ」
頭から湯気を出している少女をなだめると、少年は先頭に立って歩みを進めた。

第一章　この世界へようこそ

そして気がついたとき、少年は椅子に座っていたわけで。

――あれ？

小首をひねった少年の視界に入ってきたのは、見慣れた教室の風景。

目下、六時間目の授業の真っ最中で、教卓の前にいるのは担任の数学教師だ。

何が起こったのかよく理解できてない少年に、唐突に声がかけられた。

「おい、一戸。一戸為男」

ごく自然に、少年は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしょうか先生」

教師が、ちょっと嫌な感じの笑みを浮かべながら訊く。

「問四の答えは？」

少年はあまり数学が得意ではなかったけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いていたのか。てっきり目を開けたまま寝ていたのか、と思ったよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、少年は赤面して椅子に座った。そして、

――ここはどこ？　ぼくはだれ？

と、かなり真剣に自問自答をした。

少年だって莫迦ではないから、ここはいつもの高校の教室で、自

分は『一戸為男』であることは、そりゃあ痛いくらいによく分かっているのだ。ただ、ほんのちょっぴり違和感が頭のどこかをふわふわ漂っていて、それが気になって仕方がない。
さっきまで、別の場所に居たような気がするし、ずっと、ここに居たような気もする。
さっきまで、違う名前だった気もするし、ずっと、この名前だった気もする。
――おかしいなあ。
と、少年はうんうん唸ってしばらく考え込んだ。のどに魚の小骨が刺さっているような、そんな嫌な感じが頭の奥深くに存在していて、なんともいえない気持ち悪さを生み出している。そんな少年を見て、隣の席の女子生徒が心配そうな声を出した。
「どうしたの？　気分悪いの？」
囁くような小声で問われ、少年も同じような声で応えた。
「大丈夫。何でもないよ、『木村』さん」
そう、その通り。少年の隣にいるのは、まごうかたなき『木村』さんだった。
――先生が言った通り、ぼくは寝てたのかな。
さしあたって、少年はそんな結論で落ち着くことにした。

やがて授業終了の鐘が鳴り、教室の中が騒がしくなった。
ぼんやりとした足取りで廊下に出た少年に、一人の男子生徒が声を掛けた。
「一戸、もう帰るのか？」
「ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」
「お前もいい加減に部活に入ればいいのに」
「いいよ。『加藤』みたいに運動神経よくないから」
「そうか、じゃあこれから部活だから。また明日な」
「さよなら」
会話はケチの付けようも無いほどに、よどみ無くかわされた。少

年の記憶が正しければ『加藤』はサッカー部だったはずである。
――やっぱりぼくは一戸為男だ、まちがい無い。
九十九パーセントの確信を得て大きくうなずくと、少年は下駄箱へと足を向けた。

＊＊＊＊＊＊

「ぼくは『いちのへ　ためお』だ」
少年は学校を出ると、まっすぐ駅に向う。
「ぼくは『いちのへ　ためお』だ」
少年は自動改札に定期券を通して、電車に乗る。
「ぼくは『いちのへ　ためお』だ」
少年は自宅の最寄り駅で降りて、再び改札を抜ける。
「ぼくは『いちのへ　ためお』だよな……」
声に出して再確認。少年にとって、それは疑いの余地の無い確固たる現実、のはず。
学校を出てから自宅に至るまでの道筋には、全く不都合が無かった。ここまでは迷うことなく『一戸為男』でいられたのに、駅を降りたところで初めて問題が発生したのだ。
一戸為男は、自分の家の鍵を持っている。そして、財布にそれが入っていることも知っている。家の住所も知っているし、さらには家の外見も知っている。だが、
――親のことが思い出せない。
これは結構重大だぞ、と感じた為男はこめかみを軽くもんだ。
為男だってまぎれもない人間であるから、両親がいるはずである。もしかしたら別の場所に住んでいる、とか、既に他界している、という可能性もあるけれども、それならそれで、為男自身がその事実に関する知識を持っていないといけないはず、なのだ。
ところが、その情報が、為男のなかからすっぽりと抜け落ちてしまっている。

学校で感じていたかすかな違和感が、為男の中でむくむくと首をもたげてきた。
――なぜ、両親に関する情報だけ持ってないんだろう？
悩みつつ迷いつつも、為男はきれいに舗装された道を歩き、とある一軒家までたどりついた。門の前で立ち止まると、家全体を注意深くながめる。
――まちがいなく、一戸為男が住んでいる家だ。
為男はしつこいほどに確認した。
この規模の一軒家であれば一人暮らしは有り得ない、という知識――この場合は常識といったほうがいいかもしれない――を持っているがゆえに、為男は慎重に行動した。
仮にも同居人がいれば、失礼の無いように行動しなくてはいけないからだ。
為男は音を立てないようにそっと門を開けると、震える手で財布から鍵を取り出した。それを慎重に鍵穴に差しこみ、時計回りに回転させる。ちいさな金属音とともに開錠されたのを確認すると、為男はまるで泥棒のようにして屋内に体をすべりこませた。
――生活感が漂ってるなあ。
それが第一印象。ただ、自分が住んでいる家なのだから、生活感があるのは当然のこと。
たたきの上で低く身をかがめたまま、為男は忙しく眼球を動かした。
目についたのは、靴箱の上にある花瓶と花。それは造花ではないし、しおれてもいない。とすると、この生花は誰かが準備した、ということになる。
自分は花など買うだろうか、と考え、為男は首を左右に振った。普通に考えるなら準備したのは女だろうな、と結論づける。
――おそらく、ぼくは一人暮らしではないだろうけど……。
一番ありがちなのは母親が用意した、というものだけれど、それならそれで母親の知識を為男は持っているはずである。不思議な違

和感が飽和して、視線を落として考えこんだ為男の視界に、ある物が飛びこんできた。
靴。
それも二足あり、しかも見覚えがある。
――学校指定の革靴。しかも女物だ。
そこまで認識した為男の額から、滝のように汗があふれはじめた。

「一戸為男には、姉や妹がいただろうか？」
いいえ、居ません。
「一戸為男には、近所に住んでいる親戚の女の子がいただろうか？」
いいえ、居ません。
「一戸為男には、家に呼べるような彼女、もしくは友達である女子生徒がいただろうか？」
いいえ、居ません。

いいえ、いいえ、いいえ。そんな情報は持っていません。
結論。
警告！　有り得ない状況です！　ここは一戸為男の家ではない可能性があります！

為男の耳に、ブッブー、という嫌な効果音が鳴り響く。直後におどろおどろしい極彩色で脳内に描かれたのは、『不法侵入』の四文字。
家に入る前に呼び鈴を鳴らしておけばよかったのかもしれないが、今となってはアフターフェスティバル、つまり後の祭り。仮にも、同じ学校に通う女子生徒の家に勝手に鍵を開けて音も無く入った、となれば、それはもう一大事、としか言いようが無い。
――見つかる前に、逃げないといけないじゃないか！
と、為男は世界を救うべく立ち上がった勇者のように強く決意したが、

残念なことに遅かった。
何かを感じて顔を上げた為男の視界に飛びこんできたのは、一人の髪の長い女の子。
ブラウスに付いているリボンの色から一年生であるとわかり、為男の冷汗の量は急激に増大した。同学年の知っている生徒ならまだ言いわけのしようもあるけれど、下級生となるとどうにもならないからだ。しかも、相手は見るからに結構性格のキツそうなキレイ系の女の子で、生半可な言いわけなど微塵も通用しそうに無い。
為男の動揺をよそに、その下級生の女の子は黙ってこちらに近づいてきた。
更にまずいことにもう一人、少し幼さの残るかわいい感じの別の女の子が現われ、短い髪を揺らしながら小走りにこちらに向かってくる。
逃げ出そうとして足の動かない為男の前にやってきた二人は、為男が何か言う前に、
その場にひざまずいた。
「お帰りなさいませ、『ご主人さま』」
「『ご主人』、お帰りなさいです」
それぞれ声音のちがう少女たちの台詞を聞きながら、為男はその場に立っているのが精一杯だった。

為男が、まるでさらし粉で漂白されたように脳内が真っ白になりつつも、
「ええと、うん、あれだ。……ただいま！」
と、ほがらかに言ったのは、さしあたってその場を取り繕おう、というせこい考えから。ところがどっこい、髪の短い方の女の子が、
「にへへ」
と、笑って為男の学生鞄を取り上げるようにして持ち、もう一人の髪の長い女の子が、
「どうぞ」

と、うやうやしくスリッパを出してくれたので、為男は仕方なしにそれを履いてずかずかと家の中に上がりこんでしまった。
まるで勝手知ったるいつもの我が家、のような感じで大きな部屋までたどりついてしまった為男は、
――ああ、ここは居間かな、それともダイニングと呼んだほうがいいのかな。
などと、どうでもよいことを考えて誤魔化していたが、それでも女の子に示されるままに角型の大きなテーブルに座りこみ、二人の女の子が相対するように座りこんでしまった後では、黙っているわけにもいかなくなった。
為男は諦めて現実と向きあうと、少し考えてから訊いた。
「……それで？」
二人の女の子は、顔をちょっと見あわせてから応じた。
「『それで？』というのは？」
「二人は、ぼくのことを知ってるの？」
「そりゃあ当然でしょ。『ご主人さま』だから」
と、なに言ってるのこのひと？　みたいな感じで髪の長い女の子に言い返されたので、為男はかなりバツの悪そうな顔をしながら、
「いや、でもぼくはふたりのこと知らないんだけど」
と、真剣に言った後で、小さくため息をついた。二人の女の子は再び顔を見あわせて、
「ねえ落子、こういう『設定』だったっけ？」
「ええと、わたしはよく覚えてませんですけど」
「どうすんの？」
「と、とりあえず……自己紹介でもしておきますですか？」
などと、為男には意味不明な会話をしている。
それでもひそひそ話のあげくにふたりの意見が決まったらしくて、髪の長い方の女の子が、
「あたしは色部冷子、見ての通り高校一年生よ、ご主人さま」
と、あでやかに言いつつ、とても一年生とは思えない魅力的な足

を組みかえ、おとな顔負けの大きな胸をそらしてみせると、もう一人の髪の短い女の子は大きく挙手してから、
「わたしは逆井落子です！　同じく一年生です、ご主人！」
と、まるで選手宣誓をする運動会の小学生みたいに、元気よく言ってのけた。
「……はあ」
と、為男がため息混じりにそうつぶやいたのも当然のこと。
これって自己紹介になってないんじゃないのかな、とか、いやいや、名前が分かっただけでもマシなのかな、とか内心でぼやき、手紙で『放課後、校舎裏で待ってます』と呼び出されたのに結局誰も来なかった、みたいな切ない気持ちになりながらも、為男は覚悟を決めて大事なことを訊いた。
「で、二人はぼくの何なの？」
それに対する答えは二人同時で、一片の迷いも感じられない口調。
「『下僕』です」

かくしてこの家で都合三度目となるため息をついた時、為男は決意した。
もうこうなった以上、全部正直に言うしかない、と。
「ぶっちゃけて言ってしまうと、ぼくは状況が全然分からないんだ」
と、為男はまるで全面降伏した全滅寸前の部隊の指揮官のような口調で言うと、
「ぼくは何なんだろう」
と、自分でもかなり曖昧だなあ、と思われる質問をした。
これで『だからご主人さまです』などと返すのだけは許して欲しいなあ、などと為男が祈ったのも僅か数瞬のことで、二人は再び同時に答えた。
「『魔王』の最強の部下で、『四天王』の筆頭です」

しばし、沈黙。
虚を突かれた為男はあんぐりと口をあけたまま、冷子は形のよい眉を軽くひそめたまま、落子はにへへと笑ったまま、てくてくと時間が流れていった後で、
「まおう、っていうのは、『魔』の『王』なの？」と、為男は訊いた。
色部冷子がえらそうにうなずく。「そうよ」
「じゃ、ぼくは悪者の部下なの？」と、為男は顔をしかめた。
逆井落子がこくこくとうなずく。「ですです」
「つまり、ぼくも悪い人？」と、為男の顔がさらにけわしくなる。
返ってきたのは、二人並んでの春風のように爽やかな笑み。「はい、ものすごく！」
そして再び、沈黙。

沈黙を破るべく口火を切ったのは冷子で、
「ねえ、やっぱりおかしいよ。『設定』とちがうじゃん」と、断定すると時計を見て「もうこの時間なら日は落ちてるわね」と、独語しつつ、為男に向かって「そこの鏡を御覧になってください」と、名前の通り冷たく言い放った。
思考が停止したままの為男は、言われるがまま、自分の左にある大きな鏡を見た。

そこに映ったのは異形の存在。
牙。爪。蝙蝠のような翼。盛り上がった筋肉。

「夜は鏡の中に真の姿が現われるの。一応、人らしい形はしてますでしょ？」
と、色部冷子がくふふっ、と笑った。
逆井落子はちょっと困ったような、嬉しいような、不思議な顔で

為男を見ていた。

第一章　この世界へようこそ（後書き）

横書き……慣れないです……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2001y/

導師オッショーの台本

2011年11月3日23時43分発行